

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁 (一)

小林 定義

1 ルネッサンスの光と闇

一般にルネッサンス期が中世の闇黒からの夜明けであり、そのかぎりにおいて生のよろこび、若さ、希望にみちた時代であったことは否めない。だが同時に、こうした明るいオプティミズムのある反面に、暗いペシミズムが濃い影をおとしていることもまた否定できない事実であって、とうぜんのことながら、それは文学、芸術にみちみちの姿をとってあらわれている。有名な「死の舞踏」(dance macabre)のテーマもその一つのあらわれで、十五世紀フランスに始まったこのテーマは、そのちヨーロッパ各地の美術、詩歌にくりかえし描かれ、歌われた。

イタリヤ、フランスに比べるとその開花のおそかったイギリス・ルネッサンス——十六世紀中葉からと考えてよい——にもやはり、オプティミズムとペシミズムの二面性が見られる。(イギリスの場合、美術には見るべきものが無く、この現象は主として文学に限定される。) この間の事情をもちとも雄弁に物語っているのは、マーロー(Christopher Marlowe, 1564～93)とウォルター・ローリィ(Sir Walter Raleigh, 1552～1618)の二つの詩であらう。オプティミズムの例としてマーローの詩をまずあげよう。題して「羊飼よりその恋人へ」(The

Passionate Shepherd to His Love) とする。

Come live with me and be my Love,
And we will all the pleasure prove
That hills and valleys, dale and field,
And all the craggy mountains yield.

There will we sit upon the rocks
And see the shepherds feed their flocks,
By shallow rivers, to whose falls
Melodious birds sing madrigals.

There will I make three beds of roses
And a thousand fragrant posies,
A cap of flowers, with a kirtle
Embroider'd all with leaves of myrtle.

A gown made of the finest wool,

Which from our pretty lambs we pull,
Fair lined slippers for the cold,
With buckles of the purest gold.

A belt of straw and ivy buds
With coral clasps and amber studs :
And if these pleasures may thee move,
Come live with me and be my Love.

The shepherd swains shall dance and sing
For thy delight each May-morning :
If these delights thy mind may move,
Then live with me and be my Love.

僕のもとにきて恋人になつておくれ、
丘や谷や野原や
岩山がなし出す
ようごびを味わおうではないか。

岩に腰をおろして眺めよう、
せせらぎの音に鳥たちが美しく
声をあわせている川のほとり
羊飼たちが羊に草をはませているのを。

君はつくつてあげよう、

薔薇のふしどやたくさんの匂やかな花束、
てんにんかの葉で刺しゅうしたスカートと
花で編んだ帽子も。

美しい子羊からとつた
こまやかな羊の毛の上衣、
寒さよけには純金のびじょうをつけて
美しい裏うちをした上靴も。

麦わらとつたのつぼみでベルトをつくらう、
珊瑚のこはせと琥珀のボタンをつけて。
もしこうしたたのしみがほしかったら、
僕のところにてきて恋人になつておくれ。

五月の朝には君のために
羊飼たちが踊り歌うだろう。
もしこうしたたのしみがほしかったら
僕のところにてきて恋人になつておくれ。

ルネッサンスの詩歌で好まれた「愛」と「田園趣味」(pastoralism) という二つのテーマがとけ合つて、マローのこの詩は見ごとな生の讃歌となっている。そこには一片の暗い影も、迷いもない。

マローの詩が発表されたのは一五九七年。その翌年、ウォルター・ローリーは「マローの羊飼に対するニンフの返事」(The Nymph's

Reply to Marlowe's Passionate Shepherd 乙題の答詩
ローのキプロス、マロウの区、維新のウ、心、心、心。

If all the world and love were young,
And truth in every shepherd's tongue,
These pretty pleasures might me move
To live with thee and be thy love.

Time drives the flocks from field to fold,
When rivers rage and rocks grow cold,
And Philomel becometh dumb;
The rest complain of cares to come.

The flowers do fade, and wanton fields
To wayward winter reckoning yields;
A honey tongue, a heart of gall,
Is fancy's spring, but sorrow's fall.

Thy gowns, thy shoes, thy beds of roses,
Thy cap, thy kirtle, and the posies
Soon break, soon wither, soon forgotten,
In folly ripe, in reason rotten.

Thy belt of straw and ivy buds,

Thy coral clasps and amber studs,
All these in me no means can move
To come to thee and be thy love.

But could youth last and love still breed,
Had joys no date nor age no need,
Then these delights my mind might move
To live with thee and be thy love.

もしこの世と愛とに若者があつたれ
羊飼の言葉が真実なら
たのしみに心寄せわれ
あなたの恋人ともなりまじょうものぞ。

川が荒れ、岩がしめたくなるとあ、
羊たちは野から柵へと追いやられ
ナイティンゲールは啼きやみ
ほかの鳥たちも明日を思わざらう。

花はしおれ、草おしげる野原も
気ままな冬の前に枯れてゆく
甘い言葉も心のがち、
空想の春、悲しみの秋。

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁（小林）

上衣も靴も薔薇のふしども
帽子もスカートも花束も
やがて破れ、しおれ、忘れられる、
愚かきつのも、知恵もすたれ。

麦わらとつたのベルトも
珊瑚のびじょうも、琥珀のボタンも
けっして私の心を動かして
あなたの恋人にならせることはない。

もし青春が不滅で、愛が朽ちぬものなら、
よろこびが色あせず、老いに貧しさがなければ、
あなたのおっしゃるたのしみに心きそわれ
あなたの恋人ともなりましょうものを。

ローリはマーローの詩型——弱強調四歩格 (iambic tetrameter) の
二連対句 (rhymed couplet) から成る六つのスタンザ——とその言葉
づかいを巧みに利用して、見事なパロディをつくりあげている。そし
て、パロディなるがゆえに、マーローの詩のオプティミズムに対する
ペシミズムが、いっそう鮮かに浮彫りされるのである。愛も、青春も、
世界も信じ得ぬ暗い懷疑が全篇に流れている。そしてそれは、けっし
てウォルター・ローリ一人の懷疑にとどまるものではなく、イギリ
ス・ルネッサンスの人々に共通した懷疑でもあった。

そのことは、エリザベス朝時代を中心とする十六世紀中葉から十七

世紀中葉にいたる、ほぼ百年間のイギリス・ルネッサンス期の詩歌の
中に多くの例証が得られるのである。以下「無常感」とも呼び得るこ
うした憂愁ないしペシミズムのさまざまの姿をさぐってみたいと思う。

2 時間と死の意識

時間とは永遠に対するものであり、時間の意識にはつねに無常感が
伴うものである。イギリス・ルネッサンスの人々はこのような時間を
痛々しく感じとっていたようで、そのことは時をテーマとした詩が、
ルネッサンスのあらゆる時期に、いろいろな詩人によって歌われたこ
とでわかる。すでに見てきてローリの詩にもその意識が底に流れてい
た。

Time wasteth years, and months, and hours,

Time doth consume fame, honour, wit, and strength,

Time kills the greenest herbs and sweetest flowers,

Time wears out youth and beauty's looks at length,

Time doth convey to ground both foe and friend,

「時」は歳月を荒廃させ

「時」は名声、榮譽、知恵、力を消耗させ

「時」は緑の草、美しき花を枯れさせ

「時」は青春と美女の面を疲れさせ

「時」は敵も味方も地上に打ち倒す……

トマス・ワトソン (Thomas Watson, 1557~92) の「時」
(*Time*) と題されている詩の第一スタンザの五行はあまな、あらゆる
ものを無と化する時の猛威は、つづく第二、第三スタンザにおつても同
じ調子でくりかえされる。おなじく「時」(*Time*) と題されているチ
ャールズ・フレッチャー (Giles Fletcher, 1549~1611) の詩は、時
の猛威が嘆かれている。

In time the strong and stately turrets fall,

In time the rose and silver lilies die,

時とととに堅固な堂々たる塔も崩れ
時とととに薔薇や白百合も枯れ行く……

あらゆるものを無と化する時の猛威と同時に、時の「無常迅速」にも
思ひが向けられた。その好例はロバート・ヘリック (Robert Herrick,
1591~1633) の「時に寄つて」(*Upon Time*) といふ詩である。

Time was upon.

The wing, to fly away;

And I call'd on

Him but a while to stay;

But he'd be gone,

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁 (小林)

For ought that I could say.

.....

An hour glass,

In which were sands but few,

As he did pass,

He shew'd, and told me too,

Mine end near was,

And so away he flew.

時は翼にのって

飛び去って行く、

やめし一時なりと

とどちしてほしいと言ったのに

私の言葉に耳をかきず

時は去るといつてきかなかった。

.....

通りすがりに

砂の残り少ない時計をみせ

お前の終りも近ごと

私に言つて

向うの方へ飛び去った。

ヘリックは「キャンドルマス前夜祭」(*Ceremonies for Candlemas Eve*) にも同じも時の無常迅速をうたっている。また、ロバート・サウスウェル(Robert Southwell, 1561~95) もその「時は移り変る」(*Times Goes by Turns*) にもこう

Times go by turns, and chances change by course,
From foul to fair, from better hap to worse.

時は移りかわり、ものみな時の流れによって変り行く、
悪より正へ、幸運より不運へと。

と歌っている。こうした時の無常迅速の意識の上に立って、かの有名なスペンサー(Edmund Spenser, 1552~99)の「神仙女王」(*Fairie Queene*) の第七巻「無常體」(*Two Cantoes of Mutabilitie*) も書かれたものがあることがわかる。

時の猛威、無常迅速にたづする意識が死の意識へと移って行くのはあわめて自然なことである。たとえば、ウォルター・ローリの「墓碑銘」(*The Author's Epitaph, Made by Himself the night before His Death*) も

Even such is Time, which takes in trust
Our youth, our joys, and all we have,
And pays us but with age and dust;
Who in the dark and silent grave,
When we have wandered all our ways,

Shuts up the story of our days :

時とはまさにかくの如きもの、
私たちの青春、よろこび、全財産をあつかっておろして、
返すのはただ老令と塵。

私たちが人生を歩みおえんと、
私達の過去の物語のすべてを
暗い、沈黙の墓場に閉じてしまふ。.....

では、ルネッサンスの人々の心をとらえていた死のイメージはいったいどのようなものであったろう。「キューピッドと死神」(*Cupid and Death*) という戯曲の中から抜かれ、ユールデン・トレジャリ(*The Golden Treasury*) に「最後の征服者」(*The Last Conqueror*) という題名をおたえられた、シエイトズ・シャリー(James Shirley, 1596~1666)の詩では、死は地上のいかなる征服者の力も及ばぬ絶対の征服者として描かれる。

Victorious men of earth, no more
Proclaim how wide your empires are :
Though you bind-in every shore,
And your triumphs reach as far
As night and day,
Yet you, proud monarchs, must obey
And mingle with forgotten ashes, when
Death calls ye to the crowd of common men.

地上の勝利者たちよ、

お前たちの帝国の広大さを誇るな、

お前たちがあらゆる国々を手中におさめ

お前たちの勝利が全世界におよぶとも

誇らしげな君主たちよ、お前たちの運命は

名も無き死者たちの仲間入りだ、

死神がお前たちを庶民たちの群に呼び出す時は。

「ゴールデン・トンジャリ」の第二巻には、同種の詩として他に、同じジャリーの「平等主義者・死」(*Death the Leveler*)、フランシス・ボウモント (Francis Beaumont, 1584~1616) の「ウェスト・ミンスター寺院の墓」(*On the Tombs in Westminster Abbey*) の二篇の詩がおさめてあるが、いずれも、地者の何者も抗うことの出来ぬ絶対者としての死をうたった詩である。

このように、歴史上かつてない地上の栄華を誇ったエリザベス朝時代にも、死はその暗い影をおとしていた。いや、この世をうましき世と思う人々の心にこそ、死の影がしのびよるものだというべきかもしれない。

ルネッサンスはギリシャ、ローマの古典の復活の時代であったが、ローマの哲学者、ボエチウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, 470?~527) の著書「哲学の慰め」(*De Consolatione Philosophiae*) に次のような詩がある。

たとえ名声が遠く離れた人々に伝わって

やかましくもてはやされても、また

爵位を授与されて家門のほまれとなっても、

死は花々しい名誉をさげすみ、

身分の低い人にも高い人にも平等に訪れ

卑劣なことも高貴なことも同等に扱う。

信義の人ファブリキウスの骨は今どこにあり、

プルートウスや謹厳なカトーはどうなったのか

死後のささやかな名声がわずかばかりの

文字でむなししい名を留めているにすぎない。

(渡辺 義雄訳)

「オックスフォード・イギリス文学の手引」(*The Oxford Companion to English Literature*) によれば、「哲学の慰め」はエリザベス朝時代に広く愛読され、女王自身その英訳を試みたというほどであるから、ジャリーはもちろんのこと、当時の人々の死に対するイメージに強い影響をあたえたことは疑えない事実であろう。いずれにしろ、われわれはジャリーとボエチウスの死のイメージの類似に驚かざるをえない。

3 「無常感」の 比 喩

さて、時間と死の意識はおのずから人の命のはかなさを思う心になる。ルネッサンス人はきそってその心をうたった。そこにさまざまの比喩が生れた。その多様性はじつに驚くばかりのものがある。今、

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁 (小林)

その中から代表的なものの特色あるものをいくつかとりあげてみよう。
 数多い比喩のなかから、人の命を「花」にたとえた例がしばしば多く
 だ。ウ・リリアム・ドラモンド (William Drummond of Hawthorn-
 den, 1585~1649) が、こぼれゆく花を見てめながら「わの命のちか
 なれを思ふ」。

Look how the flower, which lingering doth fade,
 The morning's darling late, the summer's queen,
 Spoiled of that juice which kept it fresh and green,
 As high as it did raise bows low the head :
 Right so my life, ...

見よ、ついでちかほすまど
 朝の寵児、夏の女王であったこの花が
 新鮮なと緑の源であった命の水をうばわれ
 名残りおしげにしおれ、地に頭をうなだれるのを。
 私の命もまたにかくの如あのの……

次の例はヘンリ・キング (Henry King, 1592~1669) の「葬送歌」
 (*The Dirge*) の第三シタナサカイ。

If [= the existence of man's life] is a flower, which buds
 and grows,

And withers as the leaves disclose ;
 Whose spring and fall faint seasons keep,
 Like fits of waking before sleep :
 Then shrinks into that fatal mould
 Where its first being was enrolled.

人の一生は花。咲きひらいたかとおもうと
 葉の萌えいずるとともにしおれ、
 その春も秋も、眠りの前のうつつの時に似つ
 らだかむはなご。
 やがて、その生命を得し
 運命の土へと帰りゆく花。

珠玉のような可憐な詩に、可憐な花を歌いこむことの多かったヘリ
 ックが、花の中に人の命のはかない姿を読みとったのはとうぜんのこと
 である。「恋人を思つて」(*A Meditation upon His Mistress*) と
 らう詩では恋人の「ちらには詩人自身の命がチェーリップ、あらせら
 とう、薔薇、すみれにたとえられてゐる」。

You are a tulip seen today,
 But dearest, of so short a stay ;
 That where you grow scarce man can say.
 You are a lovely July-flower,

Yet one rude wind or ruffling shower
Will force you hence, and in an hour.

You are a sparkling rose i' th' bud,
Yet lost ere that chaste flesh and blood
Can show where you or grew or stood.

.....

You are a dainty violet,
Yet wither'd ere you can be set
Within the virgin's coronet.

You are the queen all flowers among ;
But die you must, fair maid, ere long,
As he, the maker of this song.

あなたはチューリップの花、
今日咲きほこつてはいるが、命は束の間、
明日ともなればありかも知れぬ。

あなたは美しいあらせいとうの花、
風に吹かれ、夕立に打たれば
あつこいう間に姿は見えぬ。

あなたは輝く薔薇の花、
清純な仲間がそのありかを教える前に
もう消えて姿もない。

.....

あなたは可憐なすみれの花、
乙女の冠に飾られる前に
しおれて見る影もない。

あなたは花の女王、
だが、美しい女よ、あなたもやがて
この唄の作者どうよう死なねばならぬ。

表面的には花そのものをうたっていると見えて、実は人の命をうたっている。いわば詩全体が隠喩である例も多い。ちぎりにリックに花の詩が多いと言ったが、そのうち「花にやせつ」(To Blossoms)、「水仙に」(To Daffodils)、「桜の花に」(To Cherry-blossoms)などほえうしたたぐいの詩といつてよからう。今こゝでは、ルネッサンス末期のリチャード・ファンシマー (Sir Richard Fanshawe, 1608~66) の「薔薇」(A Rose)と題された詩の第一スタンザを引用しよう。

Blown in the morning, thou shalt fade ere noon :
What boots a life which in such haste forsakes thee ?

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁(小林)

Th' art wondrous frolick being to die so soon :
And passing proud a little colour makes thee.

今朝咲いたばかりなのに正午までの命もない、
そのように急いでお前を見捨てる生に何の意味があろう。
お前はやがて命が尽きるというのに、驚くほど陽気だ。
わずかばかりのうす紅に誇らしげにさえ見える。

このように人の命を花にたとえることは、東西の古典にも見えるところであらう。たとえば旧約聖書、ヨブ記第十四章、第一、二節には「人の命は短かく、悩みが多い。花の如く生れ出でては散り行く。」(Man that is born of a woman is of a few days, and full of trouble. He cometh forth like a flower, and is cut down : . . .) とある。

さきに引用したヘリックの詩の第一、第三スタンザも、同じ聖書の詩篇、第百三章、第十五、十六節の、「人の榮は野の花の如きもの。風が吹きわたれば姿はなく、その咲き出でた場所に問うても知らぬ。」

(. . . as a flower of the field, so he [man] flourisheth. For the wind passeth over it, and it is gone ; and the place thereof shall know it no more.) という表現に学んだのかも知れない。ヘリックは英国々教会の司祭であった。

また、イギリス・ルネッサンスの詩人と同じ比喩が、日本最古の詩集である万葉集にみられるのも、花を見る心の東西交らぬところが知られて面白い。

高山と海こそは 山ながら 斯くも現しく 海ながら然真なら
め 人は花物ぞ うつせみ世人

(巻十三、三三三二)

夏まけて咲きたる唐楳ひさかたの雨うち降らばうつろひなむか
(巻八、一四八五)

現し世、人の命を「泡」にたとえた詩人もあった。「人生」(Life)と題される詩の冒頭をフーコン(Sir Francis Bacon, 1561~1626)は、

The World's a bubble, and the Life of Man
Less than a span : . . .

この世は泡、人の一生は
束の間のもの……………

うたたい、きたテラモンテ

This Life, which seems so fair,
Is like a bubble blown up in the air
By sporting children's breath, . . .

かくも美しく見えるこの世も
遊びたわむれる子供たちが

空中に吹きあげるシャボン玉……

ではじまる詩がある。

はかなきものを泡にたとえるのはルネッサンス人に共通であつたらしく、シェクスピアにも 'the bubble reputation' (はかなき名声) といった表現 (「お気に召すまま」二幕、二場) のほか二、三の例が見える。そして、これがどことなく東洋的であるのは、われわれが万葉集の、

巻向の山べとよみて往く水の水沫の如し世の人われは

(巻七、一二六九、人麿歌集)

水沫なす微き命も拷繩の千寿にもがと願ひ暮らしつ

(巻五、九〇二)

といった歌や、「一切の有為法は、夢・幻・泡・影の如く」(金剛經) といった、この世を「虚仮不実」とみなす仏教的世界観に親しんでいるためであろうか。

先に引用したベイコンの詩行の五行あとに見える「水を彩る」('to linn the water') とどう表現も東洋に類例をみることが出来る。

Who then to frail mortality shall trust,

But linnms the water, or but writes in dust.

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁 (小林)

なれば、もうき命を信じることは
ただ水を彩り、砂に文字書くわざなり。

'to linn the water' という表現は O・E・D によれば「諺」として「はかなき、徒勞なことにひびいて言う」('said of something transient or futile) とあり、ベーコンの例が最も古い例として引用されている。ところで、わが万葉集には、

水の上に数書くときわが命妹にあはむとうけひつるかも

(巻十一、二四三三、人麿歌集)

という歌があり、本田義憲 (「日本人の無常観」) および中西進氏 (「柿本人麻呂」) によれば、この歌の背後に涅槃經の「是身無常念不住」(中略) 亦如画水随画随合」という言葉があるという。いずれにしても、仏典と万葉詩人とイギリス・ルネッサンス詩人の間にきわめて類似した発想がみられるのは興味ぶかい事実である。

同じ発想はシェクスピアの「ヘンリ八世」(Henry VIII) 第四幕、第二場の、

Men's evil manners live in brass ; their virtues

We writ in water.

人の悪事は真鍮に刻めるごとく、

人の美德は水に書けるごとく。

に見られ、また時代は下るが、キーン (John Keats, 1895~1921) の自ら選んだ墓碑銘「その名の水に書かれて昔、ここに眠る」(Here lies one whose name was writ in water.) の例もある。

人生を「芝居」にたとえた詩人もある。ウォルター・ローリは「すべての世は芝居」(*All the World's a Stage*) と題した詩で人生を喜劇とする。

What is our life? A play of passion,
Our mirth the music of division.
Our mother's wombs the tiring-houses be,
Where we are dressed for this short comedy.
Heaven the judicious sharp spectator is,
That sits and marks who act amiss.
Our graves that hide us from the searching sun
Are like drawn curtains when the play is done.
Thus march we, playing, to our latest rest.

この世は何だ。激情のお芝居。
私たちの母の子宮。私たちが消える楽の音。
母親のおなかはこの短かい喜劇のための
衣裳をつける楽屋。

賢い天は通のお客。

台詞をとちる奴を見守ってごらん。

きびしい陽光を私たちからちぎる墓は

芝居が終った時降りる幕。

もっとこんな具合に、芝居を演じながら最後の休息へと歩むのち。

人の一生を芝居づくりの各段階にたとえるのは、いかにも芝居好きのヘリザバス朝人の好みらしく、ヘンリ・ウットン(Henry Wotton, 1568~1639) にも同工異曲の詩がある。こゝからは人生を悲劇とする。

This life's a Tragedy: his mother's womb
(From which he enters) is the tiring room:
This spacious earth the Theatre; and the Stage
That Country which he lives in: Passions, Rage,
Folly, and Vice are Actors: the first cry
The Prologue to th' ensuing Tragedy.
The former act consisteth of dumb shows;
The second, he to more perfection grows;
I' th' third he is a man, and doth begin
To nurture vice, and act the deeds of sin:
I' th' fourth declines; i' th' fifth diseases clog
And trouble him, then Death's his Epilogue.

人の一生は悲劇、母親のおなかは

楽屋であつて、そこから人生へ登場する。

この広い大地は芝居小屋、

彼が住む土地が舞台というわけ。

情熱、怒り、愚行、悪徳が役者で、

うぶ声はそれに続く悲劇の序幕。

第一幕はだんまり劇、

二幕目にはちよつと賢くなるが、

三幕目では大人となつて、

悪徳を身につけては罪の芝居を演ずる。

四幕目では身の破滅、五幕目では病にかかり、

手足がきかず、死でもつて幕となる。

ヘンリー・キングは先に引用した「葬送歌」の中で、人生を「喜び
はみじかく、苦しむは長く、しんやう聞狂言」(a weary interlude
which doth short joys, long woes, include) にたとえてゐる。

シェクスピアの「マクベス」(Macbeth) 第五幕、第五場の次の台詞
はあまりにも有名な詩行である。

Life's but a walking shadow, a poor player

That struts and frets his hour upon the stage

And then is heard no more.

人生は歩く影、哀れな役者——

あたえられた時間だけ舞台の上で

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁(小林)

見えをきつたり、小なくなつたり、
出番がおわればどこへやら。

珍らしい比喻として人生を「宴」にたとえたものがあるが、これは
芝居のたとえから思いついたものではなからうか。リチャード・バー
ンフィールド(Richard Barnfield, 1574~1627) の「人の一生とは」
(The Comparison of the Life of Man) なる詩をみる。

Man's life is well compared to a feast,

Furnished with choice of all variety;

To it comes Time; and as a bidden guest

He sets him down, in pomp and majesty,

The three-fold Age of man the waiters be.

Then with an earthen voider (made of clay)

Comes Death, and takes the table clean away.

人の一生はまこと宴に似て

とりどりの珍味が供られる

そこへ時の神が訪れて来て

招かれ顔にいばつて腰を下ろす

幼年期、成人期、老年期が給仕役、

やがて土くれで焼いた大皿をもって

死神がテーブルを片づけにやってくる。

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁(小林)

人の命を「草」にたとえた例もある。トマス・プロクター(Thomas Procter, c. 1578)の「時宜を得て歌える——時がいかにすべてのものを消滅せしむか」(*A Proper Sonnet, How Time Consumeth All Things*)という詩の第一スタンザにそれがあつた。

Ay me, ay me! I sigh to see the scythe afield;
Down goeth the grass, soon wrought to withered hay.
Ay me, alas! ay me, alas! that beauty needs must yield,
And prices pass, as grass doth fade away.

ああ、野を刈る鎌を見てかなしい
草が倒れ、やがて枯れた干草になる。
ああ、ああ、美人も尊厳のものも
草が枯れ行くごとく死するが運命。

この変わった比喩はおそらく旧約聖書にならうたものであろう。詩篇にはそれが多く、たとえば第九十章、五、六節には、「人の子は朝に伸びゆく草の如きもの。朝には青々と生いしげるが、夕には刈り倒され、枯れてゆへ。」(…in the morning they [= children of men] are like grass which growth up. In the morning it flourisheth, and growth up; in the evening it is cut down, and withereth.) とある。しかし、聖書に数多く見えるこの比喩はルネッサンス人にはあまり好まれなかつたようである。古代イスラエルの遊牧民の詩と、宮廷を中心としたイギリス・ルネッサンスの詩とのちがいがどううか。

作者不明だが、人生を「物語」にたとえた詩もある。

Life is a poet's fable,
And all her days are lies
Stolen from Death's reckonig table; ……

人生は詩人のつくり話
その月日は死神の
勘定台から盗んできた嘘ばかり。……

芝居の比喩の項で引用した「マクベス」の台詞には、

……It is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

人生はまた阿呆のほごく物語——
喧騒と怒号にみちてはらるるが、
何の意味もやはりはしなげ。

という詩行がつづいていいる。詩篇第九十章、九節の「歳月の過ぎ行くこと物語の如し。」(We spend our years as a tale that is told.) という箇所が思いあわせられる。

人の命を「露」にたとえた詩人にバーナビー・バーンズ (Barnabe Barnes, 1569?~1609) がある。「人の一生」(*The Life of Man*) と題された詩に、

A morning dew, pearling the grass beneath,
Whose moisture sun's appearance doth impair

.....

Is man, in state of our old Adam made,
Soon born to die, soon flourishing to fade.

葉かげに真珠なし

日の光に姿消す朝の露、

.....

それが大初のアダムに似せてつくられし人の姿、
死ぬために生れ、花咲いてはやがておられる。

15
とうたわれ、ヘリックの「水仙に」(*To Daffodils*) には「二度とまたたび見出しえぬ、真珠なす朝露の如く」(....as the pearls of morning's dew, /Never to be found again.) とどう表現があるが、露が「はかなきもの」の代名詞となったのはルネッサンス期であった。ところで、聖書では「光り輝けるもの」の比喻として用いられていた(詩篇第百十章 'the dew of youth')。その点、われわれ東洋人には古

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁(小林)

くから命のはかなさを露にたとえた例は多く、先に引用した仏典、金剛経にも見え(「一切の有為法は……露の如し、……」)、また、和泉式部和歌集には、

おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへむ

と、この歌がある。

人生を「影」「夢」といった実体なきものにたとえることは、仏典の「夢幻泡影」という表現でわれわれには親しいところだが、イギリス・ルネッサンスにもその比喻が見られる。サムエル・ダニエル (Samuel Daniel, 1562~1619) に「影」(*Shadows*) と題する詩があり、その第一スタンザに次の詩行がある。

Are they shadows that we see?
And can shadows pleasure give?
Pleasures only shadows be
Cast by bodies we conceive,

われわれの眼にうつるものは影であらうか。
影がよろこびをあたえることがあろうか。
よろこびはわれわれが生み出す肉体の
影にすぎないのだ.....

聖書でも人の命は影にたとえられ、たとえば、ヨブ記第十四章、二章には「人はまた影の如く過ぎ行き、永くとどまることはない。」(… he [= man that is born of a woman] fleeth also as a shadow, and continueth not.)とあり、詩篇にも「二の例が見える。」

次の詩行は人の一生を夢にたとえた、ヘンリ・キングの「葬送歌」の第四スタンザである。

It is a dream, whose seeming truth
Is moralized in age and youth :
Where all the comforts he can share
As wandering ashes fancies be ;
Till in a mist of dark decay
The dreamer vanish quite away.

人の一生は夢、そのいつわりの真実は
老令と青春に象徴される。
人があたえられるすべてのたのしみは
風にふかれる灰にも似て、幻にすぎない。
とどのつまり、暗い死の霧の中で
夢みるものは消えて行くだけのこと。

二つの詩にみられるような、現に生きているこの人生を夢か幻かと疑うルネッサンス人の心は、古今和歌集の、

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ
(詠人しらず)
という歌の心と同じである。

4 「無常感」の流行

これまでわれわれはイギリス・ルネッサンスの人々の心に無常感があつたこと、その無常感がさまざまの姿をとって当時の詩歌にうたわれたことを見てきたわけだが、引用した数々の詩の例からもうかがえるように、無常感をうたうことが一種の流行でもあつたのではないかと思われるふしがある。もともと個人的な、あるいは社会的な、深い動機を秘めていたはずの無常感のテーマも、何時しか詩の世界のコンヴェンションと化し、詩人たちは、自らの詩の存在理由を主張するためには比喩の新しき、比喩の種類の数をもつてするより方法がなくなつたのではあるまいか。その結果、無常感の比喩、ひいては無常感そのものが次第に真実味の伴わぬ、力の弱いものになつてきた。

そうした事情の典型的で、かつ象徴的ともいふべき好例は、オックスフォードのワールド・クラシックスの「英詩集」(English Verse) 第一巻におさめられている、「人の死すべきことについて」(Of Man's Mortalitie)と題された詩であろう。一六二九年に発表されたこの六十行から成る詩は、まさに無常の比喩の集大成といった感がある。今、

その第一スタンザを紹介すると、

Like as the Damask Rose you see,
Or like the blossom on the Tree,
Or like the dainty flower of May,
Or like the morning to the day.
Or like the Sun, or like the shade,
Or like the Gourd which *Jonas* had :
Even such is man, whose thread is spun,
Drawn out, and cut, and so is done.
The Rose withers, the blossom blasteth,
The flower fades, the morning hasteth.
The Sun sets, the shadow flies,
The Gourd consumes, and man he dies.

目の前のダマスカスの薔薇、
木に咲ける花、
可憐な五月の花、
一日の朝、
太陽、影、
ヨナのひょうたん、
人はまさにかくのごときもの、
糸は紡がれ、ぬきとられ、切られ、万事おわり。
薔薇はしおれ、木の花はしなび、

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁(小林)

五月の花は色あせ、朝はうつろふ、
太陽は沈み、影は消え、
ひょうたんは細り、人は死ぬ。

比喩を並べてみせただけのことである。詩的衝動など見るべくもない。比喩だけを変えて、寸分ちがわる形式の四つのスタンザがこれに続く。その比喩をひらいてあげてみる。

第二スタンザ

物語 (a tale that's new begun) / 鳥 (the Bird that's here to day) / 露 (pearled dew of May) / 一時間 (an hour) / 親指と小指の距離 (a span) / 口歌の歌 (the singing of a Swan)

第三スタンザ

泡 (the Bubble in the Brook) / 鏡 (a Glass much like a look) / 梭 (a shuffle in Weaver's hand) / 思ふ (a thought) / 夢 (a dream) / 小川の流氷 (the gliding of the stream)

第四スタンザ

矢 (an Arrow from the Bow) / 激流 (swift course of watery flow) / 潮の干満の詰問 (the time 'twixt flood and ebb) / へちまの巣 (the Spider's tender web) / 競走 (a Race) / 決勝点 (a Goal) / 土地の分割 (the dealing of a Dole)

第五スタンザ

稲妻 (the lightning from the sky) / 飛脚 (a Post that quick doth hie) / 歌声 (a quaver in short song) / 旅 (a journey)

イギリス・ルネッサンス詩の憂愁 (小林)

three years long) 雪 (the snow when Summers come) 梨
(the Pear) 桃 (the plum)

これだけの比喩をならべあげた作者の得意顔が見えるようだ。だがもう、ここには詩作の動機であるべき無常感などはなく、あるものは空虚な言葉の羅列にすぎない。この詩はサイモン・ウォステル (Simon Wastell, 1560?~1635?) の作とされている。

ところで「オックスフォード十七世紀詩華集」(The Oxford Book of Seventeenth Century Verse) を見ると、フランシス・クォールズ (Francis Quarles, 1592~1644) の作とされている。「わがまぢやかなるうた」(Hos ego versiculos) という二十四行ほどの詩の前半十二行が、ウォステル作とされる詩の第一スタンザと全く同一であることがわかる。発表も同じ一六二九年とされている。さらに驚くべきことに、ウォステルの六十行の詩にさらに十二行を加えた詩が、同じ「オックスフォード十七世紀詩華集」に「人の死すべき運命について——その復活の希望をうたえる詩をさえて」(Verses of Mortality, with an Other of the Hope of His Resurrection) と題してあり、「読人しらず」となっている。発表されたのは前二者より一年早い、一六二八年となっている。

こうなってくると、もう作者など問題ではなくなる。個々の詩人の動機があつて使われた比喩も、ルネッサンス人共有の財産となつたわけだ。強いて言えば、ルネッサンス人すべての合作の詩である。「読人しらず」がいちばんよむらしい。

それに比べれば、日本の中世文学の無常感の集大成の感のある

「方丈記」の冒頭の二節は文学の質の点ではるかにすぐれている。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。(中略) 朝に夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人いつかたより来りて、いつかたへか去る。また知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と無常を争ふさま、いはばあきがほの露に異ならず。或は露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或いは花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

だが、ウォステル、あるいはクォールズ、あるいは「読人しらず」の作とされる先の詩も、イギリス・ルネッサンスの無常感の普遍性の証とはなろう。しばしば引用してきたシェクスピアもまた、ルネッサンスの憂愁の中に生きた詩人であるが、彼の作品の人気の秘密の一つとして、何人も及ばぬ彼の詩的創造力でもって、同時代の無常感を生々とその作品の中に表現した点があげられよう。

(昭和四十六年八月)

テキスト

The Oxford Book of English Verse 1250~1918 (New Edition),
chosen & edited by Sir Arthur Quiller-Couch. 1939 Oxford.

- The Oxford Book of Sixteenth Century Verse*, chosen by F. K. Chambers. 1932 Oxford.
- The Oxford Book of Seventeenth Century Verse*, chosen by Sir Herbert Grierson & G. Bullough. 1934 Oxford.
- English Verse I (Early Lyrics to Shakespeare)*, chosen & arranged by W. Peacock. 1928 Oxford (The World's Classics).
- English Verse II (Campan to the Ballads)*, chosen & arranged by W. Peacock. 1929 Oxford (The World's Classics).
- Palgrave's Golden Treasury*, expanded by C. Day Lewis. 1954 Collins.
- The Complete Works of William Shakespeare*, edited by Alfred Harbage. 1969 Penguin Books.
- The Poetical Works of Robert Herrick*, edited by L. C. Martin. 1956 Oxford.

- 「万葉集」(日本古典文学大系) 高木・五味・大野校注、岩波書店
- 「古今和歌集」(日本古典文学大系) 佐伯梅友校注、岩波書店
- 「方丈記」(日本古典文学全集) 神田秀夫校注・訳、小学館
- 「仏教聖典」(改訂版) 東京大学仏教青年会編、三省堂